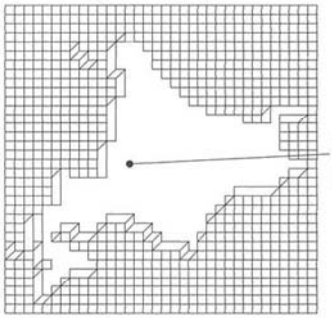
連載



あのマチ・このムラ　地域おこし活躍中

No.15

栗山町の事例

―農業情報サービスと高齢者福祉の町―

◇栗山町の位置と農業の概要

北海道の中央部に位置し、北は屈足山系をもって栗沢町と、東は夕張山系につづく緩やかな丘陵地帯で夕張市と接している。町の西南を蛇行しながら流れる夕張川は、由仁町、長沼町との境界となり、南北に二五・一㎞と細長い町が形成されている。面積は、二〇三・八四平方㎞の町である。気候は温和で年間を通じて晴れの日が多く、5月から9月までの年積算温度は二、六五四℃、日照時間は七八九・二時間である。

栗山町の開拓先駆者は、明治二十一年、宮城県角田藩士泉麟太郎の率いる夕張開墾業組合員により、うっそうたる未開のアノロ原野に開墾の鍬が入り、先人の血と汗の結晶により今日の農業基盤が確立された。栗山町は、北海道における水田開発の先駆けとなった角田土功組合が明治三十五年に結成された地であり、戦前・戦後を通じ稲作を基幹とした農業地帯である。これは、国営大夕張地区総合かんがい排水事業、更に国営直轄明渠排水事業の実施により、かっての大洪水常習河川が豊かな流れに一変すると共に、全町的に及ぶ道営圃場整備事業が完了し農業生産基盤が確立している。

一方、栗山町は全耕地面積の約七割が水稲で、種いもの産地として全国各地に供給していることでも広く知られている。減反政策開始以来水稲の作付は減少し、近年は道内の他の水稲地帯と同様、野菜を中心にした経営転換をはかり、たまねぎ、ばれいしょ、メロン、長ねぎ、かぼちゃ、ゆり根などの野菜・花きなどの高収益作物の出荷が増加している。

表1　栗山町農家戸数の推移（各年2月1日）（単位：戸）

（年）	専業農家	第1種兼業	第2種兼業	合計
62年	525	282	90	897
63年	424	371	81	876
元年	445	318	89	852
2年	361	379	102	842
3年	435	279	108	822
4年	415	269	123	807
5年	368	304	93	765
6年	421	230	102	753
7年	316	319	91	726
8年	326	315	79	720
9年	327	302	81	710

出所：栗山町企画課発行　平成8年版「栗山の統計」

◇栗山町農業の課題と対応策

栗山町農業も恵まれた自然条件や先人達の努力によって培われてきたが、昭和四十五年から始まった米の生産調整は、水稲が基幹産業だけに大きな変化を与えている。転作面積は年々増加の一途を辿っ

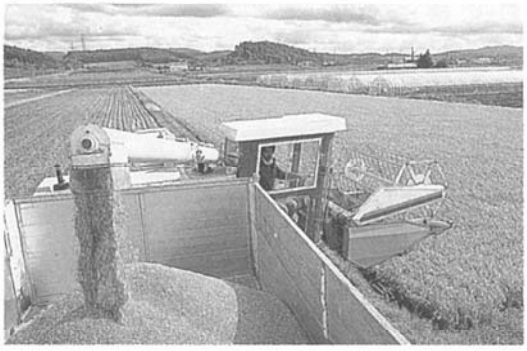
ている。（平成八年では、一、〇四九・六八ヘクタール・転作率二五％）さらに、平成九年の期中での米価の値下がり（概算払いが二、〇〇〇円下がる）は生産者に大きな打撃を与え、賃借している田の小作料にも影響している。（今年度に限り一六％の値下げ）この情勢が続くと生産意欲を失い、耕作放棄地も出現することも考えられる。これらの課題を解決するためには、町・ＪＡの出資による第三者セクターの農業支援センターが農地保全策も検討しなければならないと思われる。その一方、平成八年に補助事業（地域農業基盤確立農業構造改善事業）にて建設したＪＡくりやま米共同乾燥調整施設は、ガット・ウルグァイラウンドの農業合意の受入や食糧法の施行などによる産地間競争に勝ち抜くための対応策として、品質確保と組合員個々の施設投資の抑制など果たすべき役割は大きい。南空知の中でも栗山町の米は、平成六年一等米の出荷率が九六・三％と過去最高を記録したように着実に品質改良を加えながら歩んでいる。野菜についても、市況による価格の低迷の影響はあるものの、味と品質の良い作物づくり、有機栽培や低農薬栽培などを取り入れていく必要がある。以下、栗山町の特徴である、農業情報センターの概要と高齢者福祉施策の一端を記してみる。

表２　栗山町の主要農作物作付面積及び収穫量

（10ａあたり収穫量：kg）

作付名	平成４年			平成６年			平成８年		
	作付面積(ha)	１０ａあたり収穫量	収穫量（ｔ）	作付面積(ha)	１０ａあたり収穫量	収穫量（ｔ）	作付面積(ha)	１０ａあたり収穫量	収穫量（ｔ）
水稲	3,130	433	13,600	3,300	514	17,000	2,890	493	14,200
小麦	769	344	2,640	542	313	1,700	557	234	1,310
牧草計	295	3,640	10,700	300	3,530	10,600	323	3,630	11,700
たまねぎ	362	5,270	19,100	315	4,600	14,500	313	4,880	15,270
ばれいしょ	266	3,710	9,860	254	3,140	7,980	248	3,220	7,990
小豆	227	180	409	234	203	475	241	177	427
てんさい	149	4,280	6,360	113	4,270	4,830	89	3,580	3,190
かぼちゃ	80	1,690	1,350	84	1,760	1,470	79	1,780	1,410
大豆	61	243	148	56	284	159	73	211	154
ねぎ	56	2,830	1,580	54	3,160	1,710	57	2,840	1,620
露地メロン	40	1,490	594	48	1,810	867	50	1,580	790

出所：栗山町企画課発行　平成８年版「栗山の統計」



◀米の収穫

◇栗山町農業情報システムの概要

―栗山町農業情報サービス―

愛称KISS（kuriyama. Information. system service）

栗山町では、平成四年度の補助事業を導入、農業情報サービスを平成五年よりスタートさせた。その内容を概観すると次の様な内容である。

システムを統括しているのはＪＡくりやま三階の農業情報センタ

ーである。ここに設置されているホストコンピューターと栗山町内七〇〇戸の全農家に設置された情報端末の多機能電話が結ばれている。この多機能電話というのは、電話機とファクシミリ、液晶画面が一体となり簡単なコンピューター機能を保有しており、これによって文書と文字画像いずれの情報も送れることが特徴である。各農家はこの端末からアクセス、必要な情報を家庭に居ながら選んで引き出すことが出来る双方向システムである。画面で読む他、必要ならプリントをすることができる。現在提供されているメニューは、気象・営農・生活・流通の各情報と、農業関係の団体からの連絡、行政情報の六種類である。特に気象情報は、地区毎の細かなデータを得るため、栗山町内の七地区に気象ロボットを設置しウェザーニューズと衛星でつなぎ、データを分析・加工しセンターに保存するというシステムを採用している。その他の情報発信元は、農業改良普及センター、農業試験場、ＪＡくりやま、町広報広聴係、ＮＨＫ等になっている。メニューの中で頻繁に活用されているのが気象情報、次いで市況等の流通情報、機械関係や技術等の営農情報、生活情報の順になっている。その他、文字放送でのプロ野球・料理・観光情報等が家族に利用されている。一方、農閑期になる冬季、農業情報センターでは、パソコン研修に力を入れている。研修室には、一五台のパソコンと専門のインストラクターを配置し、若い青年層や女性はもとより、最近では五〇～六〇代の農業者を対象に操作の基本や農業簿記の講習を行なっている。また、栗山町内でのパソコン所持する農家は、二〇〇戸を超えている。その意味では、栗山町の農家にとって農業情報システムは、将来に向かって農業経営管理上の重要な営農機器であることは間違いないと言える。

尚、栗山町農業情報センターの運営経費は年間約一、五〇〇万円、町とＪＡが半分ずつ負担しており、運営に当たっては、町・ＪＡ・普及センター等にて構成されている運営委員会にて方針が決定される。

表３　栗山町年齢別農業就業人口
（農業従事者のうち主として農業に従事）　単位：人

	男女計	男	女
計	1,759(2,114)	891(1,022)	868(1,092)
販売農家	1,731(2,071)	872(1,010)	841(1,061)
15～19歳	42(59)	22(30)	20(29)
20～29歳	78(132)	47(70)	31(62)
30～39歳	236(358)	126(175)	110(183)
40～49歳	381(421)	196(198)	185(223)
50～59歳	368(463)	163(213)	205(250)
60～69歳	212(261)	104(134)	108(127)
60～69歳	196 (160)	105(62)	91(98)
60～69歳	123 (246)	60(140)	63(120)
75歳以上	123	68	55

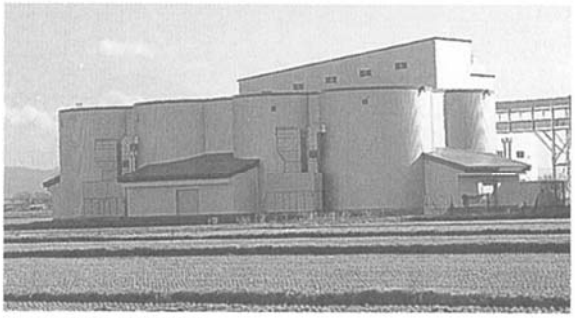
出所：'95年農業センサス。(　)内数字は'90年農業センサス

◇高齢者福祉の充実

栗山町も他の市町村と同様に、農家戸数の減少と就業人口の漸減、高齢化の進行が加速度を増している。しかしながら、栗山町は社会福祉行政とりわけ高齢者施策は全国的にも評価が高い。以下、栗山町の施策について簡単に紹介する。栗山町は行政主導型ではあるが、高齢化や小子化などの社会の変化にいち早く対応し、福祉関連施設の充実は道内でもトップクラスであり、前述の農業情報センターと

共に訪れる人が多い。

平成八年に建設された総合福祉センター「しゃるる」には、福祉課と保健課が一体となったチームによる支援システムを構築している。もう一つの特徴は、昭和六十三年に開校した全国でもただひとつの町立の介護学校「北海道介護福祉学校」である。これまで七〇〇人余りの卒業生を全国の社会福祉施設に送り出している。さらには町内の社会福祉施設にて活躍している人が多い。その他の高齢者福祉施設を挙げると、町立養護老人ホーム「泉徳園」、デイサービスセンター、特別老人ホーム「くりのさと」、老人福祉施設「ガーデンハウスくりやま」等がある。



▲米共同乾燥貯留施設

さらに、平成八年一〇月より総合デジタル通信網（ISDN）を利用したテレビ電話を活用したサービスを開始し、高齢独居老人に対する支援システムを確立している。

これは栗山町では、平成五年から町民ボランティアが一人暮らしの高齢者に定期的に電話をかける「いきいきコール」を実施しているが、双方顔が見えるテレビ電話をモデル事業として、現在四世帯の高齢者宅との間で活用している。費用は町が負担しており、その効果は顔が相手に伝わることから、対話する際に気持ちの張りが出てくるなどである。

当初は、五分程度の会話だったが、親しみや話題の広がりなどで現在は三〇分にも及んでいる。冬季間の積雪がある栗山町の高齢者にとって、テレビ電話は心の支えとなり、楽しみとなり、さらには社会参加の意欲を高めていることがわかる。

◇生産者の新しい取り組み「栗夢ランド」

地元の生産者八人より、自らの生産した農産物・加工品を販売する直売所兼「栗夢ランド」を本年四月のオープンを目指して建設している。これは単に、生産者の顔が見えるモノを提供するだけでなく、消費者が求める農産物のニーズ情報をつかみ、逆に生産者からは消費者に農畜産物の理解を求める、相互にコミニュケーションをする場の提供である。代表の大井賢治さん（四四歳）は酪農家であり、総頭数一五〇頭・搾乳牛一〇〇頭・年間搾乳量六〇〇トンである。「少年院の更正牧場」としても、マスコミ等に登場したことがある。今年からは、息子さんも酪農を始めると共に、本州からの年間雇用の若い人達が常時四人も住み込みで働いている。町も今般の「栗夢ランド」を支援、道内の優良事例の研修や町の単独補助事業等からもそのことが解る。当ランドは栗山町の南部、御園地区の小高い丘陵の草地にあり景観も良く、「ワシントンゴルフクラブ札幌コース」の入り口に位置し、当面は、彼らの生産した米・野菜・果樹・花き・アイスクリーム・ジャム等の販売をすると共に、バーベキューコーナーの設置で、素晴らしい農村の景観を見ながらの食事は、都会の人の心をなごませてくれるはずである。　農産物の特徴は、原則として有機栽培・減農薬とし、生産者の名前を入れる。大井さんは、キャンプ場の設置・子供さんを中心にした遊び場の建設など将来構想を熱く語ってくれた。彼らの取り組みは、栗山町の若い農業者に励みを与えるともに、消費者グループとの対話を通して販売の拡大を図り、ついては活力ある地域農業振興にも大きく貢献できるものと確信する。

（レポーター　専任研究員　前田　信義）

参照・巻末に栗山町情報センターシステム図をのせています。